

毒性等量濃度 最大13倍

次世代3人分

へその緒を調査



カネミ油症被害者の子どものへその緒に残留するダイオキシン類に関して調査している団体が11日、測定した1ケース3人について、ダイオキシン類の毒性を評価する際に用いられる毒性等量(TEQ)濃度が

健康者と比べ最大で約13倍に上ったなどとする調査結果を発表した。

油症被害者の苦悩を描いたドキュメンタリー映画「母と子の絆 カネミ油症の真実」製作実行委員会が

1月、被害者の子や孫ら次世代の救済を目指し、胎児期に母親から油症の原因物質ダイオキシン類が移行したことを実証しようと立ち上げた「へその緒プロジェクト」の一環。

五島市の被害者、岩村定子さん(75)の3人の子どものへその緒を、民間調査会社など2社に依頼し分析。

ダイオキシン類のTEQ濃度を測定し、健康者の出生

児や他の認定被害者の出生児のデータと比較した。

TEQ濃度は第一子(故人)のへその緒から健康者の約13倍、第二子は8・2倍、第三子は5・2倍を検出。特に油症の主因ポリ塩化ジベンゾフラン(PCDF)の濃度が高く、健康者と比べ第一子で39倍、第二子で19倍、第三子で16倍だった。

同プロジェクトの稲塚秀孝代表は「結果は母体から胎児への毒性物質の移行を示唆する証拠」と指摘。被害者の子や孫への健康影響解明を進めている厚生労働省や全国油症治療研究班に対し、「へその緒検査」の推進を求めている。

(内野大司)